

どうぞ道祖神しんぶん 第一号

2021 年 12 月 1 日
発行：道祖神芸術調査グループ

山梨アートプロジェクト 2021
深澤孝史
「道祖神リプレゼンテーション」

ご意見・ご感想は
dousojin2021@gmail.com
までお送りください。

My 丸石@甲斐市・神澤さん宅
(2021/10/31)
Photo：四方幸子
＊メールで戻ってきたデータ



「道祖神芸術調査グループ」始動

今回「道祖神芸術調査グループ」による、道祖神新聞第一号をついに読者のみなさんにお届けする。山梨県立美術館主催の山梨アートプロジェクトの深澤孝史による企画《道祖神リプレゼンテーション》をきっかけにこのグループは結成された。企画の趣旨は、山梨特有の丸石道祖神が発生した石との関わりや信仰の起源や、道祖神から派生したさまざまな文化、芸能、芸術の連なりと構造に着目して、リサーチ、フィールドワークを通して、丸石道祖神に関する新たな捉え方や表現を模索することである。九月から一〇月にかけてメンバーを募集し、さまざまな特徴をもった九人の調査員と四人のゲストの特別調査員が集まった。

せっかくなのでちよつと長くなるが、調査員を一人一人紹介したい。①鈴木つなさんは甲府のお寺に住むダンサーで、今回、主に男性に相伝される道祖神祭の舞や芸能のリサーチをとおして自身の表現を探究したいという目的を持った方である。②小池準一さんは歴史学が専門で、現在は道祖神の台座や石祠なども含む石造物に穴を穿つ盃状穴という、おそらく何かの信仰の名残りであろうものの研究をはじめている。③金丸貴臣さんは石にまつわる信仰の愛好家で、文学を専門とされている。④渡辺俊夫さんは美学・芸術学専攻の大学院生であり、人類学と芸術との横断的視点を持って自身の研究や、展覧会のキュレーションなどを行なっている。⑤近藤朋希さんはファッション系の大学生であるが、商業的なだけではなく、彼も人類的な視点を制作に反映したいという熱意を持って今回参加している。⑥広瀬和弘さんは、南アルプス市の職員として南アルプスユネスコエコパークの

推進室長をされていた方で、動物や自然の写真を長年撮影もされてきた。出身地の山梨市に流れる笛吹川で丸石を見つけたことから丸石や道祖神と移り行く風景を合わせた写真作品を撮り始め、現在は通信制の芸術大学の卒業制作の準備もしている。⑦芹沢昇さんは釈迦堂遺跡博物館の元学芸員で現在は市民講座の講師もしながら道祖神やミシャグチの調査も行なっている。⑧辻佑介さんは甲斐市出身、千葉県在住で、家の事情もあり現在は山梨と千葉を度々往復する生活をしている。もともとアートプロジェクトの参加経験もあり、地元でのアートプロジェクトの可能性を探る目的もあつて参加された。ちょうど今回、辻さんの実父が地域の丸石道祖神の氏子だったことがわかり、不思議な縁を感じている。⑨戸田圭亮さんは東京出身で、妻の実家のある甲府に数年前に引っ越してきた。現在、甲府市内にカレー屋の開業準備の真っ只中で参加してくれた。引っ越してきてから身近な丸石道祖神や、山梨での石の扱われ方に関心を持ち、オープン準備中のカレー店の敷地には自身が見つけた丸石を、屋敷神のように祀つてもいい。

このように今回さまざまなバックグラウンドの方に集まっていた。グループ全体の方向性を一つに定めるといことはできないし、する必要もないと思っている。だがこの活動を経て、石と自分が結びついて、それぞれの形で、世界の見え方や自分自身が変わっていくことを目指していきたい。長くなってしまったのでゲストの特別調査員の紹介や具体的な活動については次回へ続けたい。

深澤孝史

●○○わたしと道祖神●○○

私の住む駅前通りを西に歩くと笛吹川がある。子どもの頃の遊びといえば川釣りか草野球であつた。オイカワやウグイを釣つてはその数を競い合つていた。今ではカワセミや猛禽類なんかを探しては鳥見に夢中だ。そんな思い出のある笛吹川を久しぶりに歩いていた。ふと実家の近くで見かけた丸石が気になって、もしかしたら川で丸い石を見つけれられるかもしれないと思つたから。土手から見下ろせば無数の石たち。そんなふうに川原を眺めたことはなかったが、宝探しのようでわくわくする。それ以来何度か川原に降り立ち探してみたもののしっくりくる石には巡り会えない。ある日コチドリの子育てを偶然見つけてしまった私はすっかり石探しを忘れて撮影に夢中になってしまった。我ながらやれやれである。

気を取り直して今度は少し上流に行つてみた。長靴に履き替えて川を渡つてみる。中洲に転がっている石が気になつていたからだ。しばらく探したがやはりお目当ての石は見つからない。カワセミの鳴き声に後ろ髪を引かれつつ帰り際足元の石をけとばしてみた。するとどうだろう、砂の中からまん丸い石が飛び出してきたのだ。私はとっさに拾い上げた。これはもう何かいいことがあると勝手に思い込み、それを家に持ち帰つたのである。

実家近くの公民館の丸石は誰が置いたのか分からない。ブロックで囲まれて申し訳なさそうに隅にちよこんと置かれていた。そんな丸石も小正月にはしめ縄を巡らされて気品高く振る舞っている。人々の日常にすっかり居着いてしまった丸石。街並みや暮らしは絶え間なく流れ続けているけれど丸石は日常という川底に今もじつとたたずんでいる。そこはまぎれもない丸石の居場所だ。ふだんは見向きもされないが何かの時には人々のよりどころになる。それでもいいと思う。丸石はいつも見ていてくれたのだ。私は心当たりのある丸石を訪ねてみようと思つた。そして丸石に巡り会った記憶がよみがえってくる。ずいぶんと変わってしまった街並みも丸石だけがあの頃の面影を映し出しているかのようだ。

そして川原で拾い上げたあの丸石は今部屋のかたすみでじつとしている。



「記憶のすみか」 広瀬和弘

一〇月三十一日、合同フィールドワーク二日目。松尾神社付近の民家の軒先で、丸石に出会つた。さりげにごろりと佇んでいる。折しもの小雨による黒いつやとあいまって、私を呼んでくれたようである。家の方に声がけると、なんとフィールドワークのメンバー金丸さんの知り合いで神澤さんという。ご夫妻にうかがうと、石は造園業者が持つてきたもので、庭には使わなかったけれどそこに何年もあるという（石が自ら軒先まで転がって、落ち着いたわけではないだろう）。

この石を「MY丸石」と勝手に名づけ、またいつか会えればいいな、と思つていたら、不思議な縁で結ばれていた。一一月七日に甲府へ行つた際、深澤さんからあの石を今回、北池の展示で借りたという（家の屋敷神の位置付けではないので、借りられたとのこと）。なんと展示で再会できる！実はすでに数日前にヴァーチャルな再会があつた。MY丸石の写真を知人にメールしたところ、彼からの返信にダウンロードサイトとパスワードが。それを開けるとなんとMY丸石（！）、彼に送つた写真が戻ってきたのだ。所属機関のシステム不具合かも、とのことだけど、丸石が旅して私のもとに戻つてきてくれたかのようで愛おしい。

そう思うと、MY丸石の来歴やこれまでの旅について知りたくなつた。庭園業者はどこでこの石を得たのだろうか？笛吹川の川原かもしれない。そうすると、笛吹川の源流から流される中で、あのような姿になつたのだろうか。笛吹川は、埼玉県や東京都との県境にある関東山地を源流とする。関東山地といえ、私が調べているフォッサマグナがあつた時代、つまりかつて西日本と東北日本が分かれていて、今回のフィールドワークの地域が海面下だつた頃に島であつた地層にあつたのかも…そうすると、一億年以上前の地層から生まれたものかも、と想像は果てしない。

気の遠くなる時間と距離を経て、巡り巡つて神澤さん家に落ちていた丸石と、私との出会い。一目惚れ、相思相愛と言つていい。

かつて柳田國男は、『石神問答』を複数の研究者との書簡形式としたけれど、『丸石問答』は、人ではなくてMY丸石そのものの妄想像（妄想＋想像）的な問答となるだろう。

（つづく）

「丸石問答：その1」 四方幸子（特別調査員）

●○わたしと道祖神●○

私は、「道祖神」と聞くと、童（わらべ）地藏や双体道祖神などの石像を思い浮かべる。

「石」が好きで、国内外の石を追いかけてきた私にとっては、日本の擬人化された道祖神にはどういふわけかほとんど興味がなかった。

私にとっての「石」とは、「人間が作爲的に加工して言葉や擬人化によって語らせたものではなく、悠久の時を無言で語る存在」の魅力にこそあった。十代のころの私は、日本海に面した翡翠（ヒスイ）海岸で丸石を拾い、大人になってからも海岸などに行くと、なぜか丸い形の石ばかりを追いかけていた。

私は、一方で、「現代美術」に出会ってから石子順造（評論家）という人物を調べるようになった。そして、出会ったのが、石子さんの死後に出版された本『丸石神』（木耳社一九八〇年）だった。今回、山梨県立美術館のアートプロジェクト2021「道祖神リプレゼンテーション」に参加してくれた中沢新一さんらが、石子順造を追悼する本（石子順造の霊に捧ぐ）として出版したものだ。た。

石子順造が、現代美術やマンガを経由して、大衆芸能、風呂屋のペンキ絵、マッチ箱のラベルイラスト、大漁旗、小絵馬などを「キッチュ」というくくりで著した『ガラクタ百科』（平凡社一九七八年）が、生きた証となる晩年の仕事となり、同時に最後にたどり着いたのが「丸石」道祖神だった。

国内では、どういうわけか「丸石道祖神」が甲府盆地に数多く分布している。

石に加工がほどこされた石仏であれば、考古学者によって年代決定は可能な場合もある。

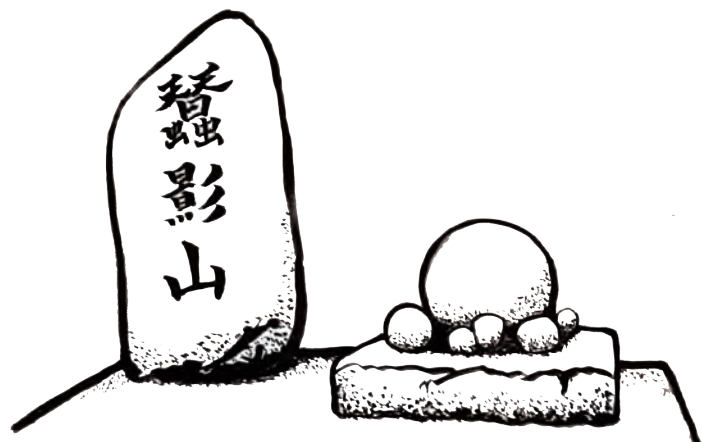
しかしながら、丸石道祖神の多くは、人為的な加工（文字など）が施されていないためか、そこに暮らす住民や山梨県立博物館学芸員らに聞き取りをしても、「丸石道祖神がいつ頃つくられたものかは、はっきりとは分からない」という。

人類は、個人から家族となり集落をつくり国家を形成していった歴史の中で、いつのまにか人間を絶対とする西洋主導の人間中心主義を世界に広めていった。

日本三大急流の一つでもある富士川の上流域域（釜無川、笛吹川）では、岩石が川の急流によって角が取れ、偶然にも丸石を生みだし堆積したことで、その後、甲府盆地に暮らす人たちの手によって、「芸術」でも権威や名声を象徴する「石碑」でもない形で丸石が大切に守られてきた歴史があったのだ。私は、こんなにうれしいことはない。

晩年の石子順造が、現代美術の作家たちに問いかけた、作品をとおして「空間（存在）と時間」をどのように表現するかの問題は、人間が創造したものではなく、実は自然の中で悠久の時を経て形づくられた、丸い形の石にそのヒントが潜んでいることを、まちがいに石子は確信していたと私は思っている。

「丸石神と石子順造」 本阿弥清（特別調査員）



きっかんじ 芹沢昇

「きっかんじ」
なんとも不思議なしかし心地よい響きの言葉であろう。こども、特に小学生の男子がよく使いそうな言葉である。その「きっかんじ」について調べてみた。地域の各戸から門松、ササ竹、しめ飾りなどを集め一月十四日の夜、道祖神場で燃し、その燃える火を形容してどんど焼き、どんどん焼きなどと呼ぶ。この時に燃やす門松やササ竹、しめ飾りなどを集めるのが「きっかんじ」である。

山梨県の甲州市塩山から山梨市の笛吹川流域で行われていた小正月の行事で一月一日から三日間行われることが多く、地域によっては一月三日、一月九日など様々ある。呼び名も「きっかんじよ」とも言う地域もあるが、「きっかんじ」・「きっかんじよ」ともに木勸進が訛ったと考えられる。道祖神のご神体を飾る「お小屋」をつくるため、材料である木材を家々から集め歩いたことにより生まれた道祖神祭りに伴う小正月の行事である。

「きっかんじ」は小正月の夜に灯籠を掲げながら行列を組んだ子供たちが太鼓と鐘を打ち鳴らし、歌を歌いながら家々を回り道祖神のお札を配り、その家の人はお札をもらう。

きっかんじ
お蚕（かいこ）上げて
米麦作って
富士山のように
お祝い申せ

お返しにご祝儀やお菓子を子供たちにあげるといふ、「商売繁盛」や「豊作」「家内安全」などを祈る行事である「きっかんじ」。子供が主体となつて祭りを行うとされているため、近年は子供の数の減少から行われない地区も増えている。
甲州市の「きっかんじ」祭りの実例を二つ紹介しよう。

その地区は一月一二日ごろにどんどん焼きで燃やす杉の葉を丸石の上に積み上げる。そして夕方、子供達が灯籠に日を灯して家内安全と声をかけて回り、おやつをもらいながら地区を回る。その後、青年団の獅子舞が回り、最後に世話役が道祖神のお札を渡し歩き各戸から、寄付を集める。

また、別の地区では一月七日辺りの夜、小中学生の子供たちが、太鼓や鐘を打ち鳴らし「きっかんじよ、きっかんじよ」と唱いながら家々を回り歩き、お札を配り、家内安全や商売繁盛などを祈願して回る。
以上のように地区ごと様々な形態がある。

小正月とは、正月一五日の行事である。一四日から一六日までの三日間、一四日の日没から一五日の日没まで、望（満月）の日、元日から一五日までの一五日間ともされる。古くはこの小正月までが松の内だったものが、江戸時代に徳川幕府の命により松の内は一月七日の大正月までとされたが、関東地方以外には広まらなかった。もともと小正月は豊作祈願などの農業に関連した行事や家庭的な行事が中心であった。本来は竈を休ませるはずの松の内に、忙しく働いた主婦をねぎらう意味で、女正月という地方もあり場所によって男性が女性の代わりに料理などの家事を行う日ともされる。

かつて元服の儀を小正月に行っていたということから、一月一五日は成人の日という国民の祝日となった。しかし、その「成人の日」という名前から小正月との関連がわかりづらく、かつ、高度経済成長期以降の都市化などの影響で小正月自体がなじみの薄いものとなったこともあり、二〇〇〇年から成人の日は一月第二月曜日に変更されている。

「きっかんじ」は木勸進が訛ったものといわれるが、本来、勸進とは寺院の建立や修繕などのために、信者や有志者に説き、その費用を奉納させることをいう。そのことにより人びとを仏道に導き入れ、善行をなさしめるのが元来の意であったが、のちには寄付を集める方法として興行を催し、観覧料の収入をもってこれに当てるといふ意味としても広く用いられるようになった。中世においては、橋や道路の修理・整備から官寺（鐘や仏像、写経をふくむ）の建設や修造など、本来は朝廷（国家）や国衙（地方行政機関）がおこなうべき公共事業も、勸進によってなされた。勸進をおこなう者は、勸進帳をたずさえて諸国を遍歴し、橋のたもとや寺社の門前、関所などで寄付を募ったのである。

勸進で思い出すことといえば、歌舞伎で馴染みの「勸進帳」である。都落ちした義経・弁慶一行は奥州へ落ちる際に「奈良東大寺再建のため諸国をまわり勸進を募る山伏である」といって弁慶が何も書いてない巻物を勸進帳に見立てて読んだという話は「弁慶のうそ読み」としてあまりにも有名である。しかし子供たちの「きっかんじ」には嘘はなく、子どもは道祖神のつかいであり、道祖神は人々を様々の災厄から守ってくれる一番近くにいる神である。子供の数が少なくなっているが、小正月の夜には各地で子供たちの弾むように歌う声が聞こえてくることを祈りたい。

書評

中沢新一『芸術人類学』（みすず書房、2006年）

私たちが生きる現代社会には、非対称性によって作動する様々なシステムが組み込まれている。中沢は現代社会の中に対称性を取り戻し、実装することが重要であると『芸術人類学』を通じて主張する。具体的には、対称性思考を神話に登場するトリックスターやマシュー・バーニーの作品などに見出し、人類の進化の過程とあわせて縦横無尽に論じる。タイトルどおりの芸術学と人類学が交差するダイナミックなパースペクティブの提示は、中沢の重要な達成である。

本書でいう対称性とは、論理的矛盾を飲み込みながら全体的な動作を行う知性の性質を指している。中沢はジュリアン・ジェインズを参照し、非対称性思考が優位となり、対称性思考が劣ったものとして追いやられたことを前提に理論を展開していく。近代的合理主義の限界が見えた現在、改めて対称性思考に焦点を当てることで、それを超克することができるのではないか。かつてクロード・レヴィ＝ストロースが「野生の思考」を未開の人々に見出したように、中沢もまたそれを下地として、新たな思考方法を模索した。

なかでも注目すべきは、中沢が山梨の丸石神信仰を取り上げたことである。金生遺跡で発掘された縄文時代の丸石と、現在は道祖神信仰として息づく丸石神の背後には共通の思考があり、その構造を解明することが、対称性思考を現代人に取り戻す手掛かりと考えた。中沢の大胆な論理的跳躍には驚かされるが、流動的な「心」と事物を規定する「言葉」のバイロジックを人類が獲得して以来の思考の構造は、縄文文化から道祖神信仰の成立に至るまでの時の流れの中に、一本の筋道を示している。考古学と民俗学を切り結ぶ、特異な地域である山梨での発見が『芸術人類学』に与えた影響は計り知れないだろう。

渡辺俊夫